

自然科学のとびら

Newsletter of the Kanagawa Prefectural Museum of Natural History

Vol. 32, No. 1 神奈川県立生命の星・地球博物館 Mar. 2026



ゴミアシナガサシガメの成虫

写真: KPM-NK 103785*
神奈川県南足柄市産

わたなべ きょうへい
渡辺 恭平(学芸員)

※当館電子台帳上の資料番号はゼロを付加した7桁の数字で表記されます

体長2 cmほどのカメムシの仲間で、長い脚をもち、脚や触角に長い毛が生えています。鎌のようになった前脚で、クモを捕まえて吸血します。古い木造家屋の室内や床下に生息し、木造建造物が多かった時代には普通に見られたそうですが、建物の近代化に伴いほとんど見られなくなり、和名のゴミとは真逆の、愛好家垂涎の幻の昆虫となっています。一昨年、神奈川県では84年ぶりに本種が再発見されました。観察会で木造家屋の付近を歩いた時に、参加者の皆さんに本種の話をしたところ、後日その

中のお一人が偶然にも本種を発見し、ご連絡いただいたことが、再発見のきっかけでした。まさか神奈川県に本種が生き残っているとは露とも知らずに、連絡を受けた時の私の驚きと興奮たるや、文字では表現できないほどです。

本種の記録は日本昆虫学会の「昆虫(ニューシリーズ)」28巻4号に発表しました。インターネットで閲覧できますので、ご興味のある方はご覧ください。

https://www.jstage.jst.go.jp/browse/kontyu/28/4/_contents/-char/ja

古い記録資料を「博物館資料」にするために —ボランティアが支える整理作業—

おおつぼ かなで
大坪 奏(学芸員)

2010年5月、筆者を含む学芸員と関係者数名は、三浦半島にある町へ向かいました。当館に縁のある研究者が残した資料をご家族から寄贈いただけることになったためです。旧書齋には、論文等の原稿や原図、研究メモやスケッチ、写真フィルム、専門書や学会誌、論文別刷りの束、調査道具など、研究活動にまつわるさまざまな資料が置かれていました。資料を確認しながら段ボールに詰めて荷造りを行い、車に積みこむと運搬準備は完了。その後、貴重な研究資料の詰まった段ボール箱が博物館へやってきました(図1)。

前号(自然科学のとびら Vol.31 No.4)「記録資料を残そう—自然史のアーカイブズとは?—」では、こうした資料がそもそも研究者の手によってどのように生み出され、どういった種類があるのか、また博物館ではどのように活用されているのかを紹介しました。

本号では、過去のいくつかの寄贈資料を例に、資料が研究者から博物館へ渡った後にどのようなことが行われるのか見ていきたいと思います。資料をいつでも参照可能な状態にするために行われる整理とデータ登録、それを進めるのに欠かせないボランティアメンバーの活動(図2)、博物館での収蔵の状況等、博物館資料として保存・活用するために行われる長く遠大な作業工程を、ぎゅっと短縮して紹介します。古い資料が、多くの人の手によって現代の博物館資料として生まれ変わる様子を見ていきましょう。

なにをおいてもまず「^{くんじょう}燻蒸」

博物館に資料が搬入されるとまず



図1. 博物館に資料が到着。手前と奥に見える3枚の木製パレット(荷役台)の上に大量の資料が積み重ねられている。



図2. アーカイブボランティアによる資料整理。

行われるのが燻蒸処理です。どんなにきれいに見えても資料にカビが生えたり、資料を食害する虫が付いていたりする可能性があります。そのまま収蔵庫へ入れると他の資料にもカビや虫が広がってしまうため、外部からの受け入れ資料は必ず殺菌殺虫のための燻蒸を行います。これで、収蔵庫で資料を保管できるようになります。

資料の全体像を知る

燻蒸が終わるといよいよ整理作業の開始です。ボランティアメンバーの活動も始まります(図3)。受け入れ前に資料の概要は把握していますが、受け入れ後は資料を取り出して確認しながら資料リストも作っていきます。ただ資料の量が膨大な場合、最初から1点ずつの確認に取りかかると何年経っても資料の全体像が把握できません。そこで段階を分けて整理することもあります。



図3. 貴重な資料を前に話に花が咲く(菌類ボランティア)。

整理は大きなかたまりから

受け入れ時点の資料は、研究者が使っていた入れ物に当時のまま収納されていたり、運搬の際の段ボール箱に入っていたりします。そこで資料整理の第一段階では、こうした大きな「かたまり」もしくはそれらを入れた博物館の資料用コンテナごとに、簡単な整理に取りかかります。どんなものが入っているのか大まかに記録しながら「かたまり」ごとに整理用の番号を振っていきます(図4)。このときが、博物館でじっくりと資料を確認できる最初の機会となります。美しく^{ちみつ}緻密なスケッチや著名な研究者から送られた手紙等、貴重な資料を前にワクワクしつつも、長期間に渡る作業の始まりに気が引き締まります。

さて、全体像がわかったところで第二段階に移ります。封筒やファイル等の小さなかたまりごとに、状態・内容・点数を確認しながら、それぞれの資料に適した収納袋に入れ替えます(図2)。重なっている資料の間には合紙を入れ(図5)、変色や変質のおそれがある写真フィルムは保存用の薬剤と一緒に封入したり、紙を留めている古く錆びたクリップを取り除いたりします。ここまで終われば、当面は資料の大きな劣化を抑えられるため、まずはほっと一息です。

第三段階では、最も細かい作業に移ります。種別(スケッチ、写真、原稿等)や内容を記録しながら保護のための中性



図4. 第一段階の整理を終えた資料。



図5. 第二段階の整理。1点ずつ資料を確認し暫定的な保存処置を行う(アーカイブボランティア)。



図6. 第三段階の整理とデータベース登録が完了した資料。中性紙の保存箱に入れ収蔵庫で保管する。

紙封筒や中性紙保存箱に1点ずつ収納し、資料番号を振っていきます(図6)。

場合によっては第二段階と第三段階は同時に行うこともあります。このようにステップを踏みながら、最終的に保存に適した状態に整えるとともに、どのような資料が何点あるかという情報を整備していきます。これによってデータベース登録の下地が整います。

使われていたときの状態を記録する

搬入前の資料には、研究者が使っていた当時の配列や分類がそのまま残っていることもあります。そこから研究者の意図や研究の背景が分かる場合もあるため、できるだけ資料の構造を崩さないよう気を配ります。しかし、作業効率や保存スペースの制約上、それが難しいことはよくあります。資料の「かたまり」ごとに番号を振りながら整理を進めることは、受け入れ時の資料の構造を記録することにも繋がります。

資料の画像を保存する

資料そのものをカメラやスキャナで複写してデジタル画像と一緒に登録する場合があります。これには次のような利点があります。

【劣化防止】資料の出し入れは、温湿度の変化や触れることによる物理的な刺激、油脂の付着等、資料にとってさまざまな悪影響をおよぼします。一つひとつの影響はわずかでも、蓄積すると資料の劣化に繋がります。資料のデジタル画像をパソコン上で閲覧することで、資料に直接接触の機会を減らし、資料の劣化を防ぐことができます。

【状態の記録】デジタル画像にはそのときの資料の状態が記録されます。過去に複写したデジタル画像があれば、現在の資料と比較して保存状態や劣化の状況を判断することもできます。

【作業の効率化】デジタル画像を保存しておく、資料を収蔵庫から取り出さなくてもパソコン上で内容を確認できるため、登録作業や調査研究活動を効率的に行うことができます。どんな内容が書かれているのかパソコン上で読んで確認するだけでなく、コンピューターの画像認識ソフトを使って手書き文字を自動的に判読させたり、AI技術を使って作業効率を上げる可能性も模索しています。

資料の撮影やスキャニングには長い時間がかかりますが、このように資料のデジタル画像から得られるメリットはとても大きいものです。そのため、活用が見込まれる資料についてはスキャンや撮影を優先的に行うようにしています。

誰もがアクセスしやすい資料へ

資料に関する情報をデジタル化し公開することは博物館の役割の一つです。長い時間をかけた整理作業とリスト作りが終わると、資料の情報を館内のデータベースへ入力し、さらにそれを公開データベースに掲載します。これで、誰もが資料の情報にアクセスできる状態になります。このとき、資料のデジタル画像も一緒に公開することで、届けられる情報量は各段に増えます。多くの人に、より多くの情報を届けることによって、資料の活用の幅はぐんと広がります。当館でも一定のルールを設けて資料のデジタル画像を公開しています。これらは研究や教育などさまざまな形で活用されています。

資料整理を支えるボランティア

資料整理の一連の流れになくはないのが、博物館ボランティアの皆さんの力です。菌類、地球環境、古生物など分野ごとの活動の中でこのような研究者の資料の整理作業を行っているほか、2024年度からは分野横断型の「アーカイブボランティア」を新たに立ち上げました。多くの有志の方々の手によって、受け入れた資料を「使える資料」にするための作業が着実に進められています。職員だけでは途方に暮れてしまうようなボリュームの作業が、少しずつ、しかし確実に進んでいく様子はとても心強いものです。ボランティアの皆さん無しには資料整理は到底成り立たないでしょう。

ここでは代表的な資料整理の流れを紹介しましたが、実際にはこれらが順序よく進むことはまずありません。他の作業との兼ね合いで優先順位が変わることもよくあります。冒頭で述べた2010年の寄贈資料については、途中で何度も休止を挟みながら、2025年冬にようやく第三段階のゴールが見えてきたところでした。

古い記録資料の中には、現代の研究にも活用できる貴重な情報が眠っています。それを未来へ残すための地道な活動は、多くのボランティアの皆さんによって支えられているのです。

先代学芸員が切り取った「自然」

はじめに

大学1年生のころ、緊張しながら先生の部屋を訪ね、講義内容について質問をしたことがあります。専門書や雑誌が積み上がり、分厚い壁のようになった部屋の最奥に、分析試料の山に埋もれるようにして先生が座っていました。私の問いを聞くと、先生は「それならこの本だ」と言い、ほんの数秒、目を伏せて考えたあと、乱雑に見える書架の中から迷いなく一冊を引き抜きました。その所作の鮮やかさは、今でも強く印象に残っています。

置いた物の所在と意味を正確に記憶していれば、整理整頓に時間を割く必要はありません。個人にとっては、極めて合理的な環境です。しかし博物館においては、「先生の部屋」のように、個人の記憶や経験に強く依存したかたちで資料を配置することはできません。博物館資料は、長い時を超えて継承され、多様な利用者によって活用される知的基盤です。そのため資料は、担当者や利用者が変わっても同じ結果にたどり着けるよう、一定の原理と手続きに基づいて整理され、情報として明示化されている必要があります。これは、個人の内部にある知識を、共有可能で再利用可能な形式へと外部化する営みです。

切り取られた自然

自然史博物館には、自然から「切り取られた自然」が保管されています。もっとも、それは採取された瞬間の自然物が、そのままの姿で保存されているという意味ではありません。自然物は、標本化の過程を経る中で加工され、また時間の経過とともに劣化も免れません。自然史



図1. 笠間ノート(全26冊)の一部。

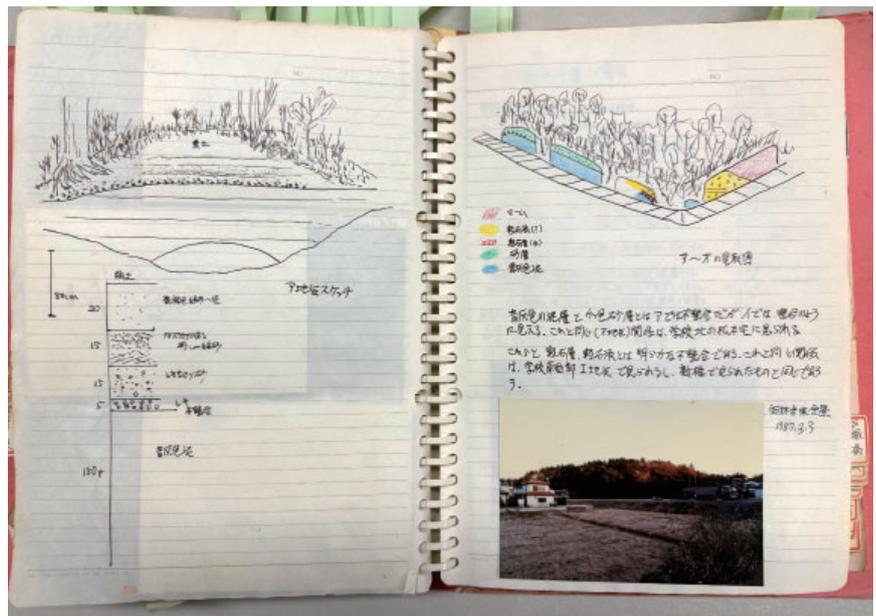


図2. 左ページ: 上部は露頭スケッチ, 下部は柱状図. 右ページ: 上部は露頭スケッチ(広域), 下部は露頭写真と解説.

博物館とは、そうした変化を前提としつつ、自然界に比べて時の流れを極力遅くすることで、標本をできるだけ長く保管しようとする場であるとも言えるでしょう。

この「切り取られた自然」には、実物としての自然物だけでなく、それをめぐって生み出された記述的な生産物も含まれます。文字による記録、スケッチ、写真、あるいはそれらを組み合わせた表現は、研究者や蒐集家^{しゅうしゅうか}が生涯にわたって自然と向き合う中で、副次的に生まれてきたものです。自然史博物館では、こうした生産物についても、その整理と保管が検討されています。

当館では、これらのうち画像資料—写真、細密画、地図等—については、比較的整理が進んでいます。なかでも、水中生態写真や標本写真から成る「魚類写真資料データベース」は、資料の共有と活用が可能となった成功例の一つです。一方で、研究者の野帳や研究ノートについては、それらをどのように整理し、管理し、公開していくのか、その基本的な枠組みから検討しなければならない段階にあります。実際、大学教員の退官を機に、研究者が長年にわたり収集した試料や研究ノートが寄贈される事例は、近年増加しつつあります。

これらをどのように資料として扱い、活用される情報として保管するかを考えるためのヒントがあります。冒頭の話で、先生の部屋のモノの配置がそうだったように、研究ノートの中身も、研究者の記録(記憶)の仕方が反映されているはずで、その癖を理解し、ノート内のどの箇所が資料として価値があり、共有可能であるか、どのような研究に資するかを判断・想定し、その情報を集中的に抽出してまとめるのです。

「笠間ノート」の重み

当館に着任してしばらく経ったころ、先代学芸員の笠間友博氏から、これまでに作成した研究ノートを博物館で活用してほしいとの提案がありました。多くが「巡検日誌」と題された全26冊を、以下では便宜的に「笠間ノート」と呼ぶことにします(図1)。これらは、1986年～2017年までのおよそ30年にわたり、同氏が神奈川県内を巡り、汗をかきながら集めた観察と考察の塊です。

笠間ノートは、地点ごとにページが区切られ、一定の構成に基づいて整理されています。おおむね、①地図(手書きを含む)、②露頭^{ろとう}スケッチ、③柱状^{ちゅうじょうず}図、④露頭の記載、⑤現像された露頭写真

(その解説を含む)から成り立っています(図2)。加えて、地形図のコピーや巡検案内書などが、糊付けされたり挟み込まれたりしている場合もあります。このように、観察結果と補助資料とが一体となって編集されている点に、笠間ノートの特徴があります。

なかでも特筆すべき価値をもつのが、現像された露頭写真です。写真は一次資料的な機能を有するとされ(瀬能, 2015)、撮影者による取捨選択や構図の編集を含むとはいえ、文字資料に比べて出来事や現象をより客観的に伝えるデータとして利用することができます。笠間ノートに収められた露頭写真や、スケールとともに撮影された火山灰層の写真の中には、現在では同じ場所で再び目にする事ができないものも少なくありません。これは、ノートが作成された当時、都市部において開発工事に伴う人工露頭が数多く存在していたことによるものです。露頭はしばしば「なまもの」に例えられるように、工事の終了とともに急速に失われてしまいます。

野外調査に基づく研究において、良好な露頭に出会えるかどうかは、研究の成否に直結します。その点で、笠間ノートを活用することにより、近隣に同じ火山灰層が類似した様相で現れる可能性を事前に見通せるため、追認のための野外調査を効率的に進めることが可能になります。さらに、仮に露頭そのものが失われていたとしても、写真から当該地点における火山灰層の厚さを読み取ることができれば、その分布を示す等層厚線図を精緻化するという、より専門的な分析にも資することができます。

このような写真の一次資料的な活用が可能なのは、笠間ノートでは、撮影地点を示す手書きの地図やスケッチが写真と組み合わせられて編集されているためです。言い換えれば、同氏が一貫した記録方法を継続してきたことが、研究ノートを個人的な記録にとどまらない、再利用可能な研究資源へと押し上げていくのです。

整理の方針

現在、笠間ノートについては、スキャンによる電子化を進めています。この作業

には博物館実習生の協力も得ています。電子化の主な目的は、先に述べたような活用を念頭に置き、火山灰や第四紀地質の研究分野において、参照可能な資料として利用できる状態を整えることにあります。電子化の対象は、前述した①～⑤の内容に限定し、ノートごとに作業を進めています。

今後、整理が進展すれば、たとえば特定の火山灰について、その写真がどのノートのどの地点で記録されているかを横断的に検索できるようにする、といった活用も構想しています。ただし、これは火山灰資料全般に共通する問題でもありますが、火山灰を同定し、固有名詞、すなわちテフラ名を付して保管する行為は、必ずしも中立的な操作ではありません。それは、何らかの観察結果やデータに基づいた、収集者自身の解釈を含むものです。

火山灰の同定方法については別稿(西澤, 2020)に譲りますが、笠間ノートに記されたテフラ名は、同氏が層相や層序の観察から導き出した判断にのみ基づいています。それらの同定の確からしさについては、笠間ノートがもつ資料的価値とは切り分けて考える必要があります。翻^{ひるがえ}って、そこには新たなテフラ研究が成り立つ余地、すなわち研究資源としての可能性までもが内包されていると言えるのです。

一方で、笠間ノートをどのようなかたちで、誰もが利用できる状態にしていくかという点については、現時点では慎重な姿勢を取らざるを得ません。原典へのアクセスを認めるかどうかを判断する際には、まず個人情報が含まれていないかの確認が不可欠です。露頭情報は、場所を特定できてはじめて研究上の価値を持ちますが、例えばその記録にあたって、「〇〇さんの家の裏の崖」といったような、きわめて個人的な情報が、写真とともに研究者個人のメモとして書き留められている場合もあります。こうした情報をそのまま公開することはできません。

「見立て」を引き継ぐ

現在私は、箱根火山におけるテフラ層序の高精度化に取り組んでいます。この



図3. 笠間氏との調査(秦野市市木沢).

研究を進める過程で、実は笠間氏にもご協力をいただき、失われつつある露頭情報の整理や、長年の調査を通じて培われてきた露頭における火山灰層の「見立て」を引き継ぐ機会を得ています(図3)。

ここであえて「見立て」という言葉を用いたのは、それが必ずしも論文に適した記載表現ではないからです。箱根の火山灰層を前にしたとき、どこに注目し、何を手がかりに層を読み分けるのかといった判断は、長年の野外経験の中で身体化された知識として蓄積されてきたものです。笠間ノートに記されたスケッチや写真、簡潔な記述は、そうした経験知が記録として定着したものであり、単なる観察結果の集積にとどまらず、調査者の視線や思考の軌跡をも伝えています。

笠間ノートの整理と活用は、こうした経験知を、個人の内部に閉じたものとして終わらせるのではなく、次の研究へと繋げるための媒介として位置づける試みでもあります。消えゆく露頭を前にして形成されてきた判断の積み重ねを、どのように記録し、どのように共有可能なかたちへと編み直していくのか。その問いは、箱根火山のテフラ層序研究という個別の課題にとどまらず、自然史博物館における研究資料の継承と活用のあり方を考えるうえでも、重要な示唆を与えるものだと考えています。

参考文献

- 西澤文勝, 2020. 広域テフラについて. 自然科学のとびら, (98): 6-7.
瀬能 宏, 2015. 生命の星・地球博物館における資料収集と評価の視点. 自然科学のとびら, (79): 2-3.

※なお、本報告はJSPS 科研費JP 24K16213の助成を受けたものです。

真鶴町貴船神社のマナズルザクラ[※]同定顛末記おおにし わたる
大西 亘(学芸員)

真鶴町の貴船神社境内に、「マナズルザクラ *Purumus incisa* Thunb. var. *manadzuruensis* T.Kawasaki」が生育しています(図1)。毎年3月下旬から4月はじめくらいに小ぶりの花を咲かせ、咲き始めは白く、時間が経つにつれて紅色になって散る、味わいのある桜です(図2)。「マナズルザクラ」は、1961年にサクラ研究者の川崎哲也氏によって貴船神社境内にあった株を元に新変種として記載されました(川崎, 1961)。記載論文では、「半島内のところどころにも見られる」とあり、真鶴半島ならではの生育状況が見られるサクラとして地名を冠して発表したことが伺えます。しかし近年では、「マナズルザクラの原木らしい」と伝えられたサクラが貴船神社に生育するものの、60年以上前の記載論文で「大木」とされたような大きさではなく、その信ぴょう性に疑義があったり、半島内の他の場所では発表以降に見つかっていない等、マナズルザクラの現状について、はっきりとした結論が得られないままでした。加えて、マナズルザクラがその形態的特徴に基づいて記載されたにもかかわらず、実際に貴船神社に生育する個体を観察すると、識別点の一つとされる毛の量に変化がある等、しばしば実物の観察結果と記載内容との不一致が見られ、はっきりとマナズルザクラと言い切れない事情もありました。実は筆者も10年ほど前に、当時町の教育委員会に



図1. 開花期のマナズルザクラ。2024年4月1日、真鶴町貴船神社, 大矢伸江氏撮影。

勤めていた知人から「貴船神社のマナズルザクラを町の天然記念物にできないか?」と相談され、まずは正確な識別の必要性を覚えて、記載論文を片手に注意深く観察したのですが、参照した識別形質に変異が大きく、正確な同定が必要だが、形態のみでの同定は難しいとの回答をしたことがありました。

サクラの仲間は外見での識別が難しい

もとより、マナズルザクラに限らず、サクラの仲間は、異なるサクラどうしても容易に掛け合わさって雑種を作りやすい性質を持ち、雑種では親とは異なる見た目が生じることもしばしばです。その特性を活用して、江戸時代以降には人為的な交配や選抜による品種改良も盛んに行われてきました。結果として多くの類似した品種が存在し、形態での識別はたびたび専門家を悩ませてきました。2011年に森林総合研究所等が、精度の高いDNAマーカーによるサクラ品種の識別法を開発し、多くの栽培系統の遺伝的背景を明らかにしたことで、これまで形態的には分からなかった様々な事実が明らかになり、ようやく実用的な識別への道筋が開かれました(森林総合研究所, 2011)。

マナズルザクラをどう識別するか

さて、以前一旦は諦めていたマナズルザクラの識別でしたが、2023年3月の真鶴町議会において、マナズルザクラに関する質問がなされたことをきっかけに、真鶴町から筆者へマナズルザクラの現状と鑑定についての相談がありました。相談の結果、貴船神社と、複数の植物園や栽培施設の協力を得て、貴船神社のマナズルザクラと「真鶴桜」[※]とされる各地の栽培系統のサンプルを入手し、当時森林総合研究所が実施していたDNAによるサクラのクローン鑑定を依頼することで、貴船神社のマナズルザクラのDNA型と形態の比較確認を実施することとしました。

具体的には、貴船神社のマナズルザクラに加え、全国3か所で栽培されている

「真鶴桜」(サンプルA、B、C)について、葉サンプルの提供を受け、森林総合研究所にDNA型によるクローン鑑定を依頼しました。あわせて、DNA型鑑定を実施したそれぞれのサクラの木から花と葉の標本の提供も受け、マナズルザクラの記載論文に照らして、それらの標本による形態比較を行いました。提供を受けた「真鶴桜」のうち、サンプルAは川崎氏がマナズルザクラから株分けした株由来の来歴を持つ木から採取されたもので、川崎氏の記載したマナズルザクラと同一のクローンであり、貴船神社のものとはDNA型でも形態的にも一致が見られることが期待されるものでした。

マナズルザクラを再確認

調査の結果、DNA型については、貴船神社のものと同様に川崎氏が株分けした来歴のあるサンプルA、そしてサンプルBが完全に一致し、同一のクローンであることがわかりました。一方、サンプルCはこれらとは異なる遺伝子型で異なるクローンであることがわかりました。また、花の標本の形態比較については、いずれの産地の標本も多少の変異があるものの、貴船神社のもの(図3)と、サンプルA、サンプルBは、いずれも記載論文に示される、「花の柄から“がく”までの表面に毛がまばらにあるか、ほとんどない」特徴が見られたのに対し、サンプルCは同じ部位に毛が密生し、記載論文に示される識別点とは異なる特徴が見られました。以上の結果から、真鶴貴船神社のマナズルザクラは、川崎氏が記載した株に由来するサンプルAと同一のクローンであり、記載論文に示された形態的特徴も変異の幅はあるもののサンプルAと一致し、「マナズルザクラ」と同定されました。一方、比較したサンプルのうち、サンプルCはDNA型において、川崎氏の記載した「マナズルザクラ」とは異なるクローンであり、形態においても「マナズルザクラ」の記載論文と異なる特徴が見られたことから、一般に「真鶴桜」とされる栽培系統の中には、マナズルザクラとは異なるクローンも含まれていることがわかり



図2. 咲き始めは白く、時間が経つにつれて紅色になるマナズルザクラ。2024年4月1日，真鶴町貴船神社，大西 亘撮影。



図3. 真鶴町貴船神社のマナズルザクラの花の標本(KPM-NA0308338)。

ました。サクラ品種のDNA型を詳細に調べた場合に、複数のクローンが含まれていることは、他にも例のあることですが(森林総合研究所, 2011)、それらの保全や植栽に当たっては異なるクローンの識別なしに混在させることは適切ではありません。特に、対象が野生由来のクローン系統である場合は遺伝子汚染が生じないように配慮が必要です。真鶴町のマナズルザクラはまさにその例に該当し、貴船神社のマナズルザクラを同定できただけでなく、真鶴町には持ち込むべきではない‘真鶴桜’の存在が判明したことも副次的な成果でした。真鶴町貴船神社のマナズルザクラの生育が再確認されたことで、今後地域での保全や活用に繋がるのが期待されます。

なお、今回実施した内容の詳細は、真鶴町より「真鶴貴船神社境内に生育するマナズルザクラについての調査報告書」として公表されています(真鶴町, 2025a, b)。また、調査で集められた標本は、真鶴町より寄贈を受け、当館の植物標本として収蔵されています。

今回、真鶴町貴船神社に産するマナズルザクラを再確認することができましたが、実は川崎氏が真鶴町や真鶴半島付近を産地として記載したサクラは他にも知られています。ミズタマザクラ、ベニズルザクラ、アメダマザクラ、アサツユザクラなどがそうです(川崎, 1959., 1961)。

これらの一部は森林総合研究所多摩森林科学園のサクラ保存林で見ることができます(森林総合研究所多摩森林科学園, 2020)。しかし、真鶴町貴船神社のマナズルザクラを除き、川崎氏が記載したいずれのサクラも現在真鶴町、真鶴半島付近での生育状況は不明です。近隣地域では、サクラに深刻な被害をもたらす外来種クビアカツヤカミキリの分布拡大といった課題もありますが、今後、様々なサクラの原産地としての地域の魅力に目を向けることがあってもよいかもしれません。

マナズルザクラの同定の取組み、また本稿の執筆に当たっては、真鶴町の関係者のみなさん、‘真鶴桜’のサンプル提供に快くご協力くださった各地の施設、森林総合研究所のご関係の方々など多くの方にご尽力いただきました。中でも初めにマナズルザクラの相談を持ち掛けて下さった故・岩本幹彦氏の情熱無くしては、今回の成果に至ることは難しかった

※ 文中では、真鶴町貴船神社に生育する川崎哲也氏の記載の元となったと伝わるサクラを「マナズルザクラ」、各地の栽培系統を「真鶴桜」と総称した。
 なお、「マナズルザクラ」は川崎氏により記載論文において命名された和名であり、「マナズルザクラ」ではないことを付記しておく。

でしょう。ここに記して深く感謝申し上げます。

引用文献

- 川崎哲也, 1959. 真鶴産サクラ類 (1). 植物研究雑誌. 34(11): 44-51.
- 川崎哲也, 1961. 真鶴産サクラ類 (2). 植物研究雑誌. 36(5): 46-57.
- 森林総合研究所, 2011. 国内初！遺伝子情報を利用したサクラ栽培品種の網羅的識別技術を開発—染井吉野など伝統的栽培品種の実態を明らかに—。独立行政法人森林総合研究所プレスリリース. <https://www.ffpri.go.jp/press/2011/20110308documents/20110308.pdf> (2026年1月21日閲覧)
- 森林総合研究所多摩森林科学園, 2020. 桜の新しい系統保全—形質・遺伝子・病害研究に基づく取組—。44p. <https://www.ffpri.go.jp/pubs/chukiseika/3rd-chuukiseika5.html> (2026年1月21日閲覧)
- 真鶴町, 2025a. 真鶴貴船神社境内に生育するマナズルザクラについての調査報告書。
- 真鶴町, 2025b. 真鶴桜の同定調査結果について(上記報告書PDFファイルもリンク先から見られます。)
<https://www.town.manazuru.kanagawa.jp/soshiki/seisakusuishin/seisakusuishin/3616.html> (2026年1月21日閲覧)

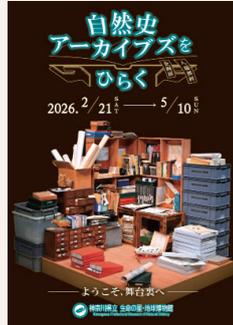
催し物のご案内

企画展「自然史アーカイブズをひらく」

2026年2月21日(土)～5月10日(日) 9:00～16:30(入館は16:00まで)

休館日: 2/24(火)、3/2(月)、3/9(月)、3/10(火)、3/16(月)、3/23(月)、3/30(月)、4/6(月)、4/13(月)、4/14(火)、4/20(月)、4/27(月)、4/30(木)、5/7(木)

野山を歩き、川や海に入り、動植物や地質等を調査・研究する自然史科学。その舞台裏では、スケッチ・メモ・写真等の膨大な記録資料が生み出されてきました。そこには、調査の足跡や失われた自然の姿、博物館の収蔵標本の情報、ときには研究者たちの情熱が眠っています。残された記録資料を読み解いて、自然史アーカイブズへの道を拓いてみましょう。



《 事前申し込みの講座 》

詳細は、博物館ウェブサイトや催物案内をご覧ください。

- 植物図鑑の使い方～春の花編～[博物館、他]
日時/4月18日(土) 10:00～12:30 ※雨天中止
対象/小学4年生～成人・教員 24人
※小学生は保護者参加必須、その場合は幼児連れ可。
申込締切:4月7日(火)
- 磯の生きものウォッチング(1)[真鶴町]
日時/4月19日(日) 10:00～14:00 ※雨天・荒天中止
対象/小学生とその保護者 30人
※保護者参加必須
申込締切:4月7日(火)
- 自然史のアーカイブズをみてみよう[博物館]
日時/4月26日(日) 10:00～15:30
対象/高校生～成人 12人
申込締切:4月14日(火)
- 昆虫採集連続講座[博物館、県西部の里山]
日時/4月26日(日)、5月24日(日)、6月28日(日)、9月20日(日)、11月1日(日)、1月17日(日)
9:00～16:00 ※全日程の参加が条件です。
対象/講座受講時に小学5年生～高校3年生の児童・生徒
※初回のみ小学生の保護者同伴可、それ以外の日は講座時間中の同行・同伴不可 15人
申込締切:4月14日(火)
- 木の実・草の実を知ろう[博物館]
日時/5月4日(月・祝) 13:30～15:30
対象/高校生～成人 16人
申込締切:4月21日(火)
- おやこで貝がらをしよう(1)・(2)[博物館]
日時/5月5日(火・祝)
(1)10:00～12:00・(2)13:30～15:30
※(1)と(2)は同じ内容です。
両方へ申し込むことも可能ですが、当選はどちらかになります。
対象/小学生とその保護者 各回6組18人
※保護者参加必須
申込締切:4月21日(火)
- オタマジャクシを顕微鏡でじっくり観察してみよう[博物館]
日時/5月9日(土) 10:00～12:00
対象/小学生～中学生 10組
※小学1～3年生は保護者参加必須
申込締切:4月28日(火)
- 初夏の鳥瞰図と地形・地図の観察会[横浜市]
日時/5月10日(日) 10:00～15:00
対象/中学生～成人 25人
申込締切:4月28日(火)
- 先生のための地層と化石入門～地域の石を未来の教材に～[大磯町、博物館]
日時/5月16日(土)・17日(日) 10:00～16:00
※2日間の参加が条件です。
少雨決行、荒天時は化石採集を中止。
対象/教員および成人 20人
申込締切:5月5日(火・祝)
- 磯の生きものウォッチング(2)[真鶴町]
日時/5月17日(日) 10:00～14:00 ※雨天・荒天中止
対象/小学生とその保護者 30人
※保護者参加必須
申込締切:5月5日(火・祝)

催し物の詳細や最新の情報は、当館ウェブサイト、および公式X(旧Twitter)でご確認ください。

生命の星



[公式ウェブサイト] <https://nh.kanagawa-museum.jp/>
[公式 X] @seimeinohoshiPR [混雑情報 X] @seimeinohoshiCI
[問合せ先] 企画情報部 企画普及課 TEL: 0465-21-1515

ライブラリー通信 フラワーセンターからの^{たまもの}賜物 ^{ほかりくみこ}甫飯久美子(司書)

2025年末、旧神奈川県立フラワーセンター大船植物園から移管された書籍の登録がほぼ終了しました。和書、洋書に続き私が担当したのが和綴じ本、江戸から明治にかけて出版された書籍たちでした。

大船植物園はその前身が1893(明治26)年に設立された神奈川県立農事試験場です。横浜港をひかえた神奈川の立地から、輸出用の



芍薬花譜(内容を一部抜粋) 1898年 京都 朝陽園

花菖蒲や芍薬の品種改良が盛んに行われました。その中心的存在だったのが宮澤文吾という研究者です。宮澤文吾は1912(大正元)年に農事試験場の主任技師になり、在職中に育成した芍薬は700品種、花菖蒲は300品種もあったそうです。

大船植物園から移管された和綴じ本には、宮澤文吾の署名が入っているものが多数あります。研究のために買い集めたものか、宮澤本人の蔵書なのか、和綴じ本は800冊を超えていました。江戸時代に流行した朝顔(牽牛花)や万年青(不老草)をはじめ蘭、櫻、竹、牡丹の図譜や解説本、本草学の本、造園や名所のガイドブック、救荒作物(飢饉や飢饉のときに備える作物)についての本、神奈川県が輸出に力を入れていた百合に関する本等、植物関連の内容は多岐にわたります。また、元の版木が売り買いされ出版元や出版年を入れ替えて摺り直しされたりしているので、実際はわかりませんが、その発行年が1600年代のものも混じっていました。

その中で特に目を引いたのは、『芍薬花譜』等美しい彩色の様々な花の図譜(図鑑)です。和紙への彩色が、現代でもその鮮やかさを保っています。令和の現代にこれらの和綴じ本を手にとってみられるのも、宮澤文吾をはじめ連綿と集め、守り、伝えてきた人々の努力の賜物だと思います。

自然科学のとびら
第32巻1号(通巻122号)
2026年3月15日発行
発行者 神奈川県立生命の星・地球博物館
館長 田中 徳久
〒250-0031 神奈川県小田原市入生田499
TEL: 0465-21-1515 FAX: 0465-23-8846
編集 本杉 弥生(企画普及課)
印刷 株式会社あしがら印刷

© 2026 by the Kanagawa Prefectural Museum of Natural History.